

暗闇の中に

三 浦 遙

奨励者紹介[みうら・はるか]

日本キリスト教団鳳教会牧師

「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」

(マタイによる福音書 6章22—23節)

ともし火の力

ここ最近、日本各地で自然災害が多く起こり、肉体的にも精神的にも、また現実として物質的にも大変な被害が出ています。最近では千葉の台風被害により、長らく停電が解消されず、苦勞された方が多くおられました。私たちの生活の中で、電気がない生活はかなりしんどいことです。家電製品が使えない、携帯も充電できない、何より明かりがない生活は、不安もより大きなものかと思います。夜の暗闇の中で、辛うじて蠟燭に火を灯すなどしてやり過ごせても、今までとは違った暗い夜の時間帯こそ、災害の苦しみをより強調し、心細くさせるものです。それほどまでに、電気ないし明かりというのは私たちの生活の中で大切なものですし、当たり前の存在になっています。

明かりやともし火と言うと、目に見えるものだけでなく、精神的なものとしてもよく扱われる言葉です。特にキリスト教においても、心のともし火や、希望の光など、より良いイメージとして用いられることが本当に多くあります。今回はそんなともし火について聖書の言葉に耳を傾けていきたいと思います。

心の火と闇

今回共にお読みした聖書の箇所は、新約聖書マタイによる福音書6章の22—23節でした。たった2節の箇所、小見出しには「体のともし火は目」と記されています。「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全体が明るい、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう」。日常の中で、「あの人の目はキラキラ輝いている」という表現を聞くことがあります。今回のこの聖書を聞くと、そういったイメージが思い浮かびます。それは、まさに希望に満ちあふれている。やる気に満ちている。夢中になっている。そんな印象を受ける言葉です。他にも、目は口ほどに物を言う、なんていう言葉もあります。言葉よりも、目から受ける印象や、雰囲気のようなものを、私たちは受け取ることがあります。そういった意味では、「体のともし火は目である」という言葉は受け入れやすいのかもしれませんが、しかし、今回の箇所ではやはり重要なのは、その輝きが失われた時どうなるのかということかと思います。

聖書の時代、もちろん電気による明かりなんてありませんので、生活の中では油を使ったランプや松明が使われていました。そして、そのランプの明かりをどのように使えばより良いかということも当たり前のようによく考えられてきたわけです。「ランプの油を切らさないこと。高いところに置いた方がより明るいこと」。そんなこ

を思いながら、生活をしていた聖書の時代の人々にとって、暗闇とは生活の中での課題の一つでありました。このランプのともし火が切れたら生活ができなくなる。夜に何も見えなくなる。そういった不自由さと向き合っていたわけです。

そういった電気ないしランプの明かりと、人間に与えられた心のともし火。どちらもなくなってしまうと辛い。特に、人間にとって希望がなくなること、目の前が真っ暗になるような絶望に立たされた時、それはその人の命を奪ってしまうほど、生きることをあきらめてしまうほどの暗さをもつ時があります。

人間の恐怖の大元は、痛みなどもありますけれども、「分からない」ということにあると思います。先のことが分からない。見えない。理解できない。極端な例で言えば「死んだ後どうなるか分からない」からこそ、人間は死を恐れる。自分とは違う人と出会う時も、同じように恐怖を抱いてしまう時があります。そして、同じように自分が傷つくことを恐れてしまう。人間にとって当たり前の感覚です。

しかし、暗闇の中でこそ見えてくるものもあるのではないかと思います。京都では、夜になっても強い明かりがありますが、本当に暗い夜にあって初めて、今まで見えなかった星の光を知ることがある。目の前の希望がなくなり、絶望に立たされる時、初めて自分の歩みを振り返り、周りを見渡すことで、今まで見えていなかった光が与えられることもあるのだと思うのです。私たちは、光ばかりを求めて、目の前にあるともし火ばかりに目がいつてしまう。しかし、そのともし火がなくなった時に与えられる暗闇の時にこそ、その暗闇の中に目を向けることも必要なのかもしれません。キリスト教にかかわる人々や、クリスチャンの中で、よく絶望の中で神様の光、希望がその時に与えられたというお話を多く聞きますが、それは少し違って、神様やイエスの与える希望の光は、今までずっとそこにあって、それを見逃していた。暗闇の中で今までもっていた、信じていたともし火が突然消えた時、初めて見る光がある。普段は見えづらく、分からない小さな光でも、昔も今も変わらず、ずっと私たちを導くともし火は私たちのすぐ傍にあるのだと思わされます。

「だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう」。私たちが今もっているともし火。まるで将来を照らしているような、安定した収入や地位、学歴、進路などはいつなくなるかも分からない光です。それらがなくなった時、私たちがもともともっていた暗闇が現れる。弱さ、傲慢さ、強欲さなど、自分の暗い部分を見せつけられる。それは、目も当てられないほど、醜いものかもしれません。将来の安心や希望がない時の自分は、本当に弱いものかもしれません。しかし、どんな時でも、暗闇の中でも神やイエスが私たちに光を示してください。私たちが見る先の道より、もっと長くはっきりとした安心を与えてくださり、行く先を照らしてください。そんな希望の光が、私たちが目をそらす暗闇の中にこそ輝いています。

今回選ばせていただいた讃美歌は、『讃美歌21』の306番です。私は小さい頃から高校卒業まで、『讃美歌』の一編と二編を使っていて、愛着もあり好きでしたし、この讃美歌も気に入っていたのですが、当時の讃美歌は4番までしかありませんでした。今回の『讃美歌21』のこの讃美歌に5番目の歌詞があったことは驚きました。1番から4番はイエスの十字架の場面を思い起こし、「あなたもそこにいたのか」と問い、そしてその「深い深い罪にわたしはふるえてくる」と終わります。しかしその5番目は喜びの時「主の復活」の場面を謳い、深い深い罪に震えていた私たちが、そのイエスの「深い深い愛にわたしはふるえてくる」ようになる。これは大きな変化です。

暗闇から見えるもの

聖書に描かれるイエスとその弟子たちの歩み。弟子たちやイエスに従って歩んでいた多くの人々にとって、目に見えるイエスという希望の光は大変まぶしいものであったかと思います。そして、まぶしければまぶしいほど大きな安心が与えられていたでしょう。しかし、イエスは十字架に掛かり、弟子と人々の前からいなくなってしまう。その時の絶望はどれほど暗いものだったでしょうか。自分たちを導いてくださるイエスがいなくなってしまった。消えてしまった。まさに、突然暗闇の中に投げ出されたわけです。イエスが十字架に掛けられる時、多くの弟子がその場から逃げ出していました。大きな安心を与えてくれたイエスが罪人として十字架に掛けられる時、イエスの代わりに安心できるものを探してしまったのです。その暗闇を受け入れることができなかったのです。それでも中には、その絶望に打ちひしがれながらも、暗闇の中で耐え続けた人々もいました。そして、復活のイエスに会い、十字架の意味を改めて知った時、深い深い罪の絶望による震えから、神の深い深い愛への希望の震えへと変えられていく。生前のイエスが、ずっと伝えていた希望の意味をようやく理解するのでした。

神は私たちに、どのような時でも希望の光を備えてくださる。どのような絶望であっても、打ちひしがれるほどの暗闇であっても、その暗闇の中に必ず光がある。私たちが見つめるべきは目の前の光ではなく、自身の暗闇の中に密かにしかし、はっきりと灯っている導きの光。そんなことを覚えて、希望をもって、それらを与え備えてくださる神に感謝しつつ、喜びの内に歩むことができればと願います。

2019年10月9日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録